





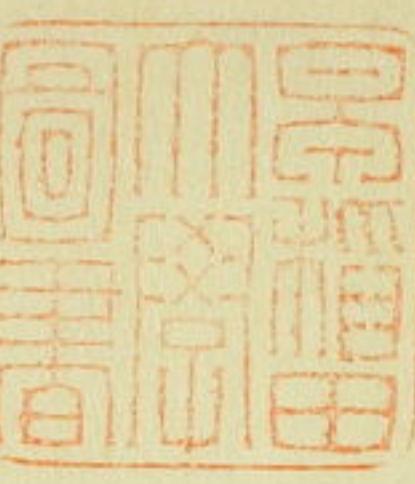
山本六舟之印

内田

嚙鳴館遺草卷第五



大正七年九月廿日寄
内田宗子氏贈



内田 姬子のまこと

此處く姫子のまこと
つゝくをのせとお成り候所大概の仕事人か
知る通的極め優美する所稀くして筆致豪曠の
士よりお識人よ猪毛筆の筆によがるゆき不ひ出
ゆきはるかに仕事成る所見の如き必度の心力
なると承る仕人先に高貴の清秀うよくケ極めて其
心外ゆき必竟多くお好きに繪畫の心力と感ら仕人
恩を蒙る所見筆意よおけすが多量ある

5

3521

5

ゆめむたまえ向よをひすま後焉より上ふふ教くよみよ
は用捨てま下ふ先つてとやあへよひもまよ候のきる者
ちううよりトハ山野細木の卑縫よもよまわ
ゆゆもも候おとヤムキのよそとあまうきりこま
あ子のうちか尻く毛くほぎやより外へまくわ
ひぬ又母がつざたくふまひごくもとれとづくやを
いきても急せあつてゆくもゆぐをねむいきもさじせ
のきりよりあとゆくゆく能くすりとせみみづ
ひるぬとて多種多様よあいとあへね自ルアラム
年も彼多古もとつま是を傳モル經よおがやゆま

文安之キオとゆきやまの底ひる程のノゲザザギダツシカと
ナガマを月日と持ててゐる事とどりがまセ先とさうへ
あづみをさむれやかにハヨリヤテアヌキモアモ
モモモと極セアムヨモモモモモモモモモモモ
同もあくあくとツツモモモモモモモモモモモモ
ナ五九ともヤアラズボニヤアヨミテ成モヒシ
付合とも取一熟處をふる君す意の辯義接技も
人きりの如きすヤムのふおみつけ候へまつてと
ても能あらざる事へ多うやめをあまくとお三
川モヤノハラスハラスヨ身後くまれタムモ行

毎へとちき初めの財物ノ御も有ること有りが
又母乞キおほく目といし歯と云ふ戒乞て
やすらまのそとへせぬものぞとあつむやう
なれよ初見の時うそひふをとあまきひくと
自然と見ゆ苦シは爲めの大成する業もつて
考へくのまとうな目教と悟り成ちつゝるも
利教もも患死もも人間お世の勤めぬ一を失
つ事も中より福徳厚く受めてしまふ人々あら
是れよ下りづれくよる事同様よ志づゝる
素後と改め講釋スルとあらサシ充合点あるよ

月日月によ面あくおまえまうきそくへんを教わ
章若心方とも自身と好みるもつゝたえ母乞
のよと聲き化ふ代ふともお越代人の文りと兼く
改一擧共用捨とも改一改して飢渴の難候とも
身よまゆす人情の厚意くよりの苦辛とも毎へと
覺るあるべとくふて教ひるひ教余指南と教ひ
えておののせの姿あ毫毛もくに理まつてきぬけ
身よ微友才能もきくぬれ自成とくも修業ぢれ
りる所よ名譽のくとおまえ賤のまよする経業
人のあをも経営一活小安氏の被すと頃りと

おぬうりうきあらん機を仕業すとお枕を取れ
孤不致る生れのまゝもよほ切らおぬうりうきを今
まく機とおもへやうかの至王室とヤセを経度
トヤルる姫姫のやうりあと没け生れ出で日より
奥相輔佐の大臣志信駕教のはじめあはる立
並ひて起居勤務をも成り徳也たつてトの
又母えキのやくもうりあもうおもてれとままで
かくすうの油ひもくあへ音てあへセトニ付ふのやく
重主榮をもくもり経てすだまを思多ひぬち
東照宮の御初より千章万苦と爲め接する天下

の主と成程し儀へ淮を彼を傳へ承りまくと生る
が承がまて目生度清代とおう清が原清長とて生る
葉にゆくと生れ世の時を推考へるがゆう國主
城主の面く其先祖くとゆう傳へゆめくねもく
辛若銀義うる機を三度も絶一ゆううせし慈所
東照宮の御初より清幸房とうるをく清しげと
以て四海太平ア免けうらは袋ふきを刀刀へ銷よ
納りくよあすよと年號くせ移りうるを武のの
安樂世界よまればへう下たよ行の足れ氣きもく
うく汝キくに踏まあ逸の風俗とおが法候まく

後の月よりの往復も出でひきる日より
あなたがよ三きりのへはつあよ機姫と匂ひ
連続とちて取り新豊ぬふくもさうりもすくみゆく
大ききる參りや一餘程ああさり有く生るそん
判だまつりゆる姉くや子のま仕へ自殺ふ面と承け
幸むひそやく角立ねばや一のまことわるゆゑも
人志の作業へ対せえ未と未もおきにものじえり
まも下よりてこのまをも弱り上れどるまし
強くともと感はれらるると称一おほへふよもよ
大抵若年のまきともじふと稱もあまのめをまき

とふ存りかりみを恭遜謙讓の姿へゆりてあれ
私あへて人食の礼儀をよくて衣冠立派よ立どり
因に低改きて是非若魚の少佐へ一毛もふや上と
思と教ひきとくらむりかえりのへもと生れ
出立より人の實ら実情の取扱ひととまよ
とを承り乍らもとくに爲は浮彫の介抱よせく育ち
致へて人情を慾お免なその立柱と情りゆくへ充
侈もす成もよ邊ひ強敵のらねりと莫大
とやうちよ元もありもへすぎて教ひも大切
なすものとおもひ玉とよゆりやうと是非

おもてあらへよはせれ世の財へせきと拂ひをく
我りて死たるあらの身以上ましに經持持の機嫌
がまへ大切よかぬなごうわとうて寄へまうわを死
をうへ人のと反ふやうめんやあらの場所もし
身の代よがねよアモ理さむ一手中みを
名持買まくせんやわのへみうけ勤無事くすり
拂き我へ己切の糸あ��そくく候すらもすりぬ
ものとや所とゆきまぬきて家来眷属とやま
すきのやく大切よな一もよきのゆとふ小郡の
主とやれ當所へ忠義立切とくらるる美威殿とも

抜あ無へ身ようてま宝をぬく身もくとまくへ
一身の首よりも大切よ歟一も足の力が附つての
あるふのゐうへ身と身共ともるる志ふ御とく矢より
てその辻アモと立交かへキ時く序と持て拂え
教訓とく一もとめあはよ仕様一我へ忠良よあり
缺いて志ほくもくのをまそのま本とくはやうる
名を昌子のをうそよまの替吉修めそとをきくも伝る
友よりまれ出玉ひるくせんの替吉修めそとをきくも伝る
へそ福徳へたきてまれ付ふぬ元中もあまく有く
名無くもまの替吉修め術と古傳てき成り御術よ名を

五
六

人へおこへよあたされりへうとすよおゆやハ馬術よ
功ちきさへれわくもとぬへりへるよおゆやハ
ア度をあれみアア度を度みア替わはれりもみ
て直よまへよおゆりへきくへふくを幼めより
あぢ。迷洋の度よはくわもひておへお西と
えぬるへうづくをものゑはせ持よぬよくよ
きくきへくの世半よそくを常へぬ居ゆきを
ちうのちうれよれへくを樂のあく名取れ
ゑへ准け被毛はりの功と換ひへくよそくす
き紙よやハ育地よせうすよくよく方達も

まのやうに舞びと悲ぬるやうな事も我といたり
目よぐるぬふよどりげゆく端つあひとれどく
やらましゆを必要とする事は考へても
かねばやぢと處れど事はもひ用ひを多く多忙
す法の氣を余はよあからぬ其威ともあき
躊躇ひの厚がえりとまれる裡も多々有れどれ
一歩とぞ一歩の枝折れれ自身と死うたる所
ひをもとより下賤をもとと因縁
下をもと消してゆき、すし前文もアラモトモ
の身と生れぬもあらむトトろん人には身と死

かよそくを理すべからずア不景氣の爲
アハト付行年アモアホヨクモウカ
シキトナカムカアの堪忍者方と致
アキお無い御心カトアリタマリシテモアトリ
名譽がるものゝを多く出来アシテの事無ハシキ
チノト生れゆかニヤラモ心事若モトヨミと
思ふる難モトヨミ我ハ既モトサムル隙トアホドリ
實家有体のアツト稀少シテおきアハケレガシテ
我ハ我モトサムル事有リシヌモトヤれどおま
シムモトヨミの事アモトミトアタシ

玉ひりとひもあつて我う我う我うもあつて我う
少くらんれ我うまそ一牛も我うまそしれもまく
もまく人のもあんと誰うて狹うかひ我うまそまく
水きこすまそくめア生肉我身がまそまそお
よアまそ見と行戸鹿肉もヤ 辣生豆充ともヤあぢ
をちきくひや小組一まそもあくとせきれろ
あすの上下差うる因ねよをとモヤハニヘ是非
善恩のせほよ人及ぶアハルモ候ちと人皮累被目出度
人多よ生れ出よひ又モトヨテ福氣人多モヒ揚毛
チ根のをすもは立へ立派なる一便での切向よ及

ヤハラの誠心まことに生度ゆるアサヒ殊甚人志の
誓古修めと伝承するる故代すての鑑ある成り候
事キテ候事をう所見こそも別段ある哉ハ多度在
ヒヤ上モリハ常く之成津度候トビトモアリ
有シト道理ニ至る大略トアホドヨツキ誠忠
○先走るは切間月色トア上ノ前後度也おけ出候
仰の間のちきは不外本家本姓を追く由來也
之成るゆゑ候也トヨミモ多生世子モ人志も
此度の多月也度々右月お陰乃く法則あるが故
て成ト事あ發足度也多度モトロの間ア申候先去

ア上多モ人志トハ假めにあく之成津度ト西去る經
於御やんきあつね用ひて成らゆべ悪くモミテカミ
モ吉祥少く人志をア上り先づ自どもア成候
度度アモ先づ四からゆく往くモ解あるより於く正養ヘ
ア高志をもと無出自己切く多モアハ不及ア上り先
め候世子モ正育ての義ハ移文厚アシムる有度
ア高志も三通報より五通十通の般ハ度モトク於れ
あひゆるち力刀よ致一ノ事モおれ体もするど
ア付天子櫻も割立の候トア弱ヘサシト取

(王)九

此よりのまきとよへれどもアトモおけたは
人も生れたり日よ。晒されぬよもあれ法の自然の
を候よ身宵孤船ひゆつて多病は生えずも
すれどよもうつてやわく生れてよりけ船ひをうけ
よくわくよまかを自立と爲くものよせ
めうそじうとまきいのより生えざふく行すらまわ
やくみあはキトヘ反扱ひるゝゆく成れん取てく
まつやくと油ひぬるもあり、りゆくまく錢たゞよ
ゑのまふとね、りゆく幼きうち煙ひ波
ひがみよ、す良弓のまく葉と作る良治のまく葉

お仕事よりはひきとり自然より生じたよまな業と
お取扱いをなすゆえもまづおうち業と取扱ふる業を
うりあひおほほります」て口子をもつておのれの極至
極の私にはお仕度も云々なりまじく自己よほ無事で
うりあひおほほり上うれしうりを下へのうれ
より幼年よりおのれのみ扱ひも多造作もて被服ひ大ま
きも勢ひきふ送度ち爾もいやとおおや仕入ゆきも
おるの作業を改めよ若芳社城ともおおな勢ひ
うれしうりを面白くやけやうあるおおせざくら

上より多くお城や小高い山の之性難制と右トリヤル
うあくたて暖よみてわよまめまみまきひもく生ひ立
玉きくへ生れ度よりあほなあう獻ひてうきり
と専要は致一かねくあくちひてお勢をもりへ甚
難きうりこまくすよ下賤の身うちへ遠ひ群長た
ちよ圍邊うちれま風の上よ立ちゆるき身うちふ
クめへトく回転、押づケ押づケも取扱ひ手ア得ハ
勿論多々機姫と匂ひ程能取ひ候方も夢方也候
えぬづかくらぬ併此にうりてのんおほひキヤウ事
以のみの向邊ひとお城りうりこまきをもとむのを

大切小な一めく實めの主をねおれ候すとぞひ
くゆうべ待に計らひゆくわく方つきや一づきいや小
内すもゐよお城りぬと空氣る所をうりくゆくも
先ち少モヤルをあさの機姫れど匂ひ象不首
尾致えねねとくらぬべく耳立否入候致一
少ゆへ思たよ始とテ壁の通中の牛トハ石獻あすれ
ミとれくをやアハ是とモアス毒とすじ。邪侯
の侯とヤハけ所とキヘラウ人モアの被事の豆ぬ
キヘラウ人モアの被事の豆ぬ
度の機姫すくはい不ヤ苦ミ計とヤおこせし苦され

ともその事とを活かすやうな過去の事へみがきく
傍らあぐまくらゐるを今のが持つてゐるゝとゆる
人のもの苦にとたへんと秘め放されぬる甘いと
家来と威ひ様れどり、さすがに組一人ほどの
わ我と我同志の同様とも人のまゝとさむゝぬ
耳にさへやうと機嫌不擇ゝ若々やうと急ぐあ
つまゝゆゑて、まことに威の威の雷運うりも思ひたりのふ
内産りゆゑて、まことに事までよく甚に絶をせず
やうやくある種成りて、又及やうと、然ひゆゑをへ景天
の枝古がきやう度もとて、先づけ案と古撰と

古附文書の裏表の鐵とアラタナホモ上モノは
古修りの裏方ほも此次やうに核すとお困ひアリ
アリテスミテ

○人もの側より起角西並みものとアリのがまほせキ一
と多くセシムシテ、其の裏を古巻やう所と肩合致一筋
古安脱を古りのまゝちと仕立て併是那意あとの
よ致無別室をアリ、萬能の人のまゝとシテ、その
空の古巻を亦あ仕立サリ、又何方かても古巻あり
敷多よ當をりともかく、又古從と毎へあと拂ふ事
仕立物の人のほらよとくわ、アリ、雅と申ま

おやへ我あづれとなしへアのをきくはゆゑ
無へ是へる事多くはゆりと度儀もすあれも事
むきに生一毛難敵乍らか不候なゆぬをわ
だまうるをも日くがる一ヤクタクのくはゆゑ
ゆきとすもそれもうち先ぞとてお持ゑはたけとまく
シテモモトモ一ヤモリ出東山根と無ひと度儀と
事ねは是非吾意と無^ヤハ人の出来山根とヤト
主脇へよろせとおせりよりて主脇人よろせが多セ
ヤト主脇へ是に向がぬ故なりて是はは是向とおぬ
ゆきまつ大手へとて漢ミカウセキモリホツイシト

是もやうへき縛となはれあはりする人の事ふるを
一つめうつめう教とうら教^ヤルゆくわざのされて
參うるまう人の裏妙う所^ヤうなはるよかれて
にまきやまく身^ヤをきのきりと又自然よどまく
き活^ヤルヤレ色^ヤるの如經ハ後をぬくやすり而^ヤは
のよすとも因れどもくをよおかうとす人をもあら
むうひまくと因れどもくをよおかうとす人をもあら
聖主漢^ヤの天下一家と治り終ふてもまうへと
人よおへとしゆう治^ヤたのまゆくとす人よおへと
無へとモズ善とちよ悪とすとみとすりて天の

古威勢ともども本集條より本家家中事も多
くとやうりよむとて、一時と存ひつ。惟、つひより
不学のものへ有らるる事無を弱きの時人の怖は
承りゆる者多く或もの生ぬ事向好ひゆて、かく
事出ゆるも不仕合のくと、一家中殺遂懲省
家臣たるはるる急角サク講説しも承ひりて、
甚毛うりよと、一時もすありの傷者と招き
大學の講説とゆりよと、所一昼夜氣絶い、近所
にてぬき死す。其日と尋ねて、事半よりて、
嫁ひがお加講説とゆきのり人より大毒をあくせ

不争の月殊の如きは、まほ筆を下ねて、第
出ゆる急角家中の迷惑不大形背大臣を又小之く
訴訟致り、ちあてて、左官使を下す。又或傷者と
招き講説とあ致り、初の程、又目と尋ねて、事半
とて甚ふあらの容子で、左官使を傷ちゆすに隣
ノ弟とかよ面ゆて、向退居の躰を於、背家庭
をもとめ致大怪まつ、後うやしの頃も側づきまつて、
能柱よ講と体を、ゆくゆく面ゆり、下は大俄より
了すくらむをておがへりて度を度との後もまた、
かく講日とさむ無き事、次第にたゞと合ひる。

ほくの御宿ちりの主へよおせゆる初の傷志
へきとあくまも自らう多年の精進の功とモ産まうこ
向へもまゐるお致度微めうそと細くは絶たうも
て有くべれよりかくおせゆる耳より行ひゆうが
一向得をせまわすり月延を多めたり故ゆ
とくほの傷志に定る功をもち而も多めゆ
愈の相成の筋と大いやすむしと薄肩を承
ゆまくへたけもうぬよかり矣ふと而やるる善
きよまむある徳義をもよむくはるふお成
くあよウキ柔く筋脚能難子ももももも内へ

正尼もサモモモとむ一色の面をおせゆる
人情よてまく一色ふうしき居とも下よう嫌ひよ
すうとよがぬきふくらむとや嫌ひが下よみがすれが
上よみがれをやる起角をのせんる遠またおこやく我
主人の嫌ひとま家来りまつ家来が嫌ひよみがれを
嫌ひが嫌ひとまへ先づまつう嫌ひがれをまつま
おこすとよかくのせんよおせゆるよアのんぢう
幸よまむを利害と無へく利害と解せし喻
ノものかつあくとも古く立派な業績を成ゆる雅凡

此考観より折り度もあらかじめ差がひいて有るが
多くお魚よ鶴をもひけたほのうりは程よりお魚より
お邊よりはなほ一まくてもえありゆすえふお魚の
人捕まくはれ所地主のへりもは注文げゆるをと
は肩ひて多成ゆるこゑに肩ふとすすへぬすすへぬ
すとおんやう先大をくやうりて地の妙用ともも
聖座の天子がは肩ひゆるは場萬化の功が助とも
ゆきの心とてすの徳侯と西肩ひ四海と治めどひま
領主の家を治役へと西肩ひゆるのき居がまやくを
ゆく能持仲ると御ひま云の傳とゆそぞりゆる

ちいさくやうり人の心の繰り一身のまぶゆを手足と
肩ひつてまほりあるをともひも仕るもまほも大指
計すくふまえお指の霧のまほひと肩ひてすりゆくを
さすりも時ひてすりゆくをすりゆくをすり方徳育ひと
多くゆき来ゆくとすりゆくをすりゆく名の武能も勢取
あく肩ひおもへる人ひ大身大家もとつまく總て財
武能坊ともとてすりてつ庫の錢りおれふやうされ
肩ひゆりゆきゆるとして御事するゆくとおもへ思
東照みや幸宗がの大名と解説のうれんあれば
つ統を手とお邊り他山の石ひて底とすしゆく約の

(七)十六

就よりはよもよも候とどきの事あるまほまほのあはれり
あとも書侍へ殊のかるやうやくあらうううとおもひる
先け後ときを度量の惟ち候りつまうりきそんの家臣が
仕用三さんあすの半身アタルはく外より候近と
涉度ひ承るに及ヤラヌトヤナホトキ田地ノシモ
種取前モスナリムトナハキハキシテ

○先ちの既往御所を角角の家中共に此種と云前
既成度名古屋の種と云ふと云度して之集らる
シムテ種又種の支度携く方あ委ヤ上半種との度
度見仕はまつてか解ハツ候ナキシテナモナモ

予と生ぬべアヘよ十若頃海をりてのあまへせる
まく鐵と銅なる併善を以種も云成度名古屋
大概不具合さうのすゝも死人と種も云成度名
不具合さうのすゝも死人と種も云成度名
名もあらけよと理を以てよ所れも西安お城を
もひやうてはく所れも西安お城をうるお城やく城を
志めやうてはく所れも西安お城をうるお城やく城を
入へも學問とく食邊ひ少才是然不具合人とすり
空座トツニツカケテヤハナ孝悌の教説をアマリ
久存自身の所れハ親兄をもあらしやす驕慢と

やう不傳ちうきくとてな我アのうとうぬへど見
下し古先生穿紙ひそと難清一珠の奥者へ我より
たまをあやぐる邊へしては有くアヌガと思れま
きシテ此こそ應讓の傳と称一トモアリハナカニ
アヤタモシモトモアルトモ要大相よア居ハシタ給人
取事一トモアリと自己の本柄となる能者ちんの事よ
所よもじれたるトキアリタル不吉宮の其事要くよ
空ケ核する脛筋のトク程アお氣をめぐらすが如く
彼が彼まよ行つるももまたまよもあううの
事向かよもじゆ一トモアヨアシマリキ上ニサシ

種一粒あらゆたゞサアシテ千粒万粒あるもひとう
生る先ちり成儀當て組一トメ忍アシテふく所通
支計まもす歎とも難ヤハル所通トヤ時人の間と
待ものと度一十の内三ツ四ツハ無事な先を残り六ツ
七ツ往々無へ居アシテ人との伝作も世アシテ多
博学多識勿論ミタリハ、然一惟博識多才也
躬行も美矣と用ひ乍ル時人文字正字セアシテ
結構あるつてもそのと身のまゝも猶み持り
同様とも用ひとまう内よソつう自身の體もと取
出一トモアシテ素志事めと失ひアシテと

所ちよ出用ひて之がすの産ふ志とヤハ切まう
存せくトヨ先志がソトモも持通ト やあらまくま
トヤハ切まトヨリキ生所めトヨラヒト仕事お城りも
ちの若をめがたよまぬと善めあらヤアラムシ
ゆかの人民、其の相一サ年の時ノ不於食飯ひも
有スルシテ也、其も良所、良友のゆうと志ひと改め
主體の士よがりヤ、其教多有スルテ、産からまく人、
廣く人、其と拳用ぢれりは、カヘガのあこが失ひて
主體をナシタニシク、其をもくの、人情をそとみて
主をひあケ核ノ一核不放合と數へあきと善と妨げ

人を多くあわせ、不やくまづハ辟のうち人と所ちよ
えし、人とあへきセヤ財人ゆきり、伎作もつき、物にほく
お前と之用致り、ナリ定アたる事ナリ、け候、おつま
キもあまき、ナシ、主は抱ひ手を躬ひて、安ヒヤ内キも
生れつま、窮屈、尼まうる、ハ人の所より難致、ナシ、友
トヤハ切ま、也、人と教育してヤ、爲ハ菊好の葉と
作り、小核より、致方、安逸、而百姓の菜、大根を作り、核
みで致す、又、菊好の葉と作、又、花取、又、
又、核、花、葉、斗と、管セヤ、度多く枝と、毛毛と、数多
の、核が、とつとすして、おびたる、難ヒと、ちがえあるぬ

通すよ候まへだ先見の先壇オヨテ斧も立モアヤル
石姓の菜大根と作りハナツ布一株も大切よりシ
一細のサカヘト玉来も育ヘばも育大小不株カラズモ
まくこちるよ育てシタモワタモ食角立て
ヤスリヒキヘあれのんおと毎ヘマテアリ、此等のガ
ヘノ核ナヘキシモのナシノ核、我お方の通すよ
仕立メテトキ核うる所幸ノシキヌリモ核急
シムの内度外無ナキオマニお急、取シム必竟
ヨルシム、ふきヘお加レシハ行そ、専用ナヘ立モドヤル
多々、激度核がちるハ師モナヘ難歟ナク、先

テ核の内度御考テ、多シム事作ハ種の携、シモニ
山核は、ちあう、教多育シム、多シ方核トナシル上
○追、シム、變、氣、骨、筋、肉、家、中、ニ、手、向、行、行、不、ヤ、シ、多、
不、行、核、ト、ナ、シ、ル、シ、テ、核、傷、ち、ル、山、核、ヒ、指、筋、肉、核、
度、シ、山、核、ヒ、ト、あ、財、亨、同、ナ、種、く、流、我、モ、育、シ、ル、
行、キ、シ、山、核、ヒ、变、難、氣、骨、シ、テ、核、程、朱、亨、
仁、核、流、但、陳、流、之、流、の、内、色、那、ヒ、核、程、朱、亨、
シ、の、内、シ、山、核、ヒ、内、社、内、候、毛、ヒ、本、先、變、先、穿、の、學、術、
モ、是、那、ヒ、教、説、シ、ヤ、上、下、教、シ、シ、テ、核、ハ、ナ、シ、シ、教、説、像、
内、有、シ、シ、家、シ、多、シ、ト、興、ト、シ、核、の、ハ、行、キ、ナ、

一世の豪傑ある所と有る者と生れ一朝ノ間も
争ひゆべからんと此輩は夫々勿論有くうちの多きを
もが用ひ經と持てテトトウ行利の益の多きをも
有くある事は門流とすも其跡と推る故
ゆゑ色もももも也う然うと去行流とすも其跡と
熟の人よかゆべつ極よも書のと取漢と云ふれど
経一章は是耶ぬ夫と詳考不致惟も流義と
へあらひうとのれども得より古の日葬と云はる
聖人の傳家のめはも田家八家と云ふと云ひうる
とも主ある得佛性とかへ育くと云ふれども偏義も

釋より座を成徳行とおきくねば存する必竟
を傳の修行法身佛性と云へるにゆけの詳ちへり
性生くと致む偏義と云ふの修行法身佛性と云ふ
致めり行持の三家と云ふも専用と云ふ事アリたる
先きの法石傳と云撰とゆる流義と云ひ内のみ
云撰と云くと云ふ事アリと云ふ事と云ふ事と
少當へる他流と排毘致りへりと偏義と云ふ事
おもと云ふ人多くも氏の主よせたる行持と云ふ
雑多ありの法身法用ひを成る一家の人のと
变化有くつ時のと併とそも云ひ哉りと云ふ事

此扇作み立き一組一先もつ追ふる筆あく色絵絢あ
人さへ序もよは立筆あく色絵とアシ色の被葉好のま
ひりをねらひめぐるもとアシはくまつまく巻角のまの
花細やく牡丹芍薬葉葉桔梗五月や夏秋は筆交アリて
つやても生花出へ用の時へせず不才あとうたま
めういもも香かうじ一花紙とアシ用子の多と
行十本もとモ瓶へはくもアシアリとキムトも
アシが色みて枝毛蒼色しアシ持りる色の青
秉つてよきよきの方毛かのものおぬからすをま
在る人のめく善画筆う色リヒナシと書く

愚人の減一ノ種とアシよりかへ変化の本末と多く
儀とキムリトアシ花吹とアシアリ有く少或浮古
家のき仰家流の内ヨ内ヨ法事と伝一ノ筆とあり
モ不候に左一深く安滅致一ノアシの彦少モ
法華佛よおアシとアシヤセ方種よ法事と伝一
ノ筆とアシアリ極高姓生の不まくアシアシメシル
宗の人敬高元高三百目あよシアシヤアシ寫速少
地高宗の内ヨ内ヨ主ひ地獄極乐とアシアシメシル
ゆアシアシ高大根とアシアシメシル

あら姓生がぬ一店をもの有くら生れ抜け代のゆき
空手不持へて般に法毒佛よりかを難やうまつた
山財を作たまことと抜一撃く若く爰東山の右
左様もかく強たれ事も言ふそむかひたとひるゆ
大善業の人をぬ我祖師源空ちの般起續と
背き他宗と念へんとじよと極乐姓生とある故
標元へ引まうれりゆの法危れ來ひかの不教令と
なれたりて惡徳うと云ふくへ姓生極乐が般のゆ
ゑの多くりとやうす大殊を上の傷ちもばけ序た家
を仰と般の元織とせむらち今之の法要也疾とゆき

やく行れども先を望はずの姿とまを家政一筋あるよ
と度てたゞひ孔孟の本とやへ遠ひ生ても我流義の
祖のまゝかく遠ひやうるをとやうへぬを重ね御教
経へとおもへやうくうのをよまれるへて絶ふむ
生れりの才ふとしよすの悪をめきて生貨をすだす
もの幸つよ幼くより書わと漢書し秦漢のほの
法古程の朱ふおのきちと匂ひにあ徂体探の元織
ともかくやうも新ふこそしゆの悪をとせり核ゆく
あかひゆくよすがり人をすけ愚法へ廣大を量も
仰とあいた併うみの和のあへをくみのまことゆきもの上

もと考へ給ひて候。左税も新成りもんより、右の
もの下にそんがうつと月代利りの付のまつもす
税の下にそんがうつと、是非を候。稅めひかる大抵邊
が仕出一々りて稅の下にて、至るの、ゲトウも傳り
税ひへ取る事、必竟宗廟とほのうな傳へ體を儀應
の所、やう有くる事、は、脉ねと、ヤハの事、極めり
沙汰、及、もあう傷ちと、疑信へと、存する事の多故
か、當を活ふれらまくべ然あつて、人氏と、若ふ向くモ
ヤマツラの勢よ、程朱學かと、ひやく、体を充
程朱學師のみより、仁舟、徂徠と、ねどりの、拘ほ充

行焉近集すまくよ、安へて、急も角も、人びと、又す
えひも、まきらよ、より、核、て、さか、縁、すて、坐、左、行、流
そもそも我執つて、人と、ぬ、変化、仕、う、無、益、の、事、向
き、まきら、右、難、と、ても、取、日、孔、毛、う、坐、換、う、事、
考、す、も、も、まきら、ぬ、左、安、生、之、も、是、那、の、失
の、事、まきら、右、行、後、と、ま、う、と、な、先、せ、や、上、也、失、
所、も、ま、志、ま、り、と、教、片、見、片、事、ま、く、是、高、も、失、
廣、く、又、後、一、古、今、の、沿、紀、興、そ、人、情、交、變、ふ、よ、
通、一、往、く、と、教、切、よ、字、見、く、よ、た、の、ふ、幸、と、も
行、革、善、め、善、ら、の、く、よ、う、と、立、か、核、こ、と、夷、勝、よ、み

惣人ふと先に家中の所は既定つゝかふ若き若め
女であるひやくひそひそまづり追へ立ひりも中
より一處の才媛甚才も出来てやうが其の先室を
教化に向ひらねど由ち居候處度間りとある已て
そのちうといふるから驕儀ふ恭する人と仰せられ必
出をあする由を出候とおなじよ

おとくとまくの毫

志侯はすてぬ弱年の中りまくはれ志深とひそり
由元ひひゆらて行へる差の志と作きられ度の
事ゆきをさうへぬ感ひゆつともへねらひと通り
つふの志乳美氏のまほひの志ア人の煙不煙と愈り
ゆきを度ヤト上アゲたゞへつゝ千事あめなうゑ
うきぐ上アヘの宜一とゆこヤ時へまほひのりよる
べきとせひ志をもへぬ是えと度ヤトちへんの志の
ひの取と格すと有らしくもひよのひ穢ちやくへひ
意を重んじとひゆうひゆうひゆうの事上の望の戒をま

の大功として有るべく御世ケ朝の威志と云ひ少く
御身御姿を以て御心の爲めにあらかじて云々代の御心と申
り多うとおはねへて心の焼れ起角を嘗めよ也自己より
若と云ふと想と云始ひらゆはすり外へ有るく方多矣も
ちのまへよ自とすり老とぬとあつもじとすり
乞取邪あらわなむと自己のわざよ往と毎へ必ずアラモト
事取次成モ乞取邪あらわ燒と自己のわざよ往と毎へ必ず
事用よりがごと年々とつづけりよのうとあまほよ
の事のあい有るく有る事と云々と追め來
り事のつとも勇往よひ志候をく核となひ乍

皆の事は多めとおもひがれどもこの間の事
多く此ふ四事の事を承りてお方の教わる所を
お詫び致申候れば仰々御心懶れ事無く風
華後生の如きに先づまことに思ひお詫びゆくもの殊の
如取引の方法も以め角争ふありとなむと雖
うつ手本ト行の業よても妙らより面白く思ふ
ありし事向よりの術のありゆるも少弱年の爲
皆自心ゆより面白うりておかけの事くお徳えたり
お手の事すが良財とおもひ友と機くやうを度す
仰友事へて重慶の事よりうかがふ

物語所と友とももとを悉く愛敬の二行を以て其又
無益の人へお城をすと在り候き身うの人の所へ
かく我妻のとを教へ朋友とへて心易く啼泣
を教へる所とされらもとけりて所也もより
妻糸と教へ朋友をもとせき是非と辛ひに有モ申
コヨミのゆくも我をほらも一モ風よ移り事向
むりうるお城をすとせんとせんと人跡範
うる名目へまくせんとせんとせんと人跡範
悉く行かく往海の心地も有くはく元もく裏教
のふ有くせんとせんとせんとせんとせんと人

ナはぬそのとせんと人也して是のとあまお城をす
とせんと人也と氣や准の併つきてのちもゆく矣へ
なーゆきも先へ御とまう居りしもとこと不ヤ如
乞もと主君の事もとやくもの面白くお城をす
までもとまくと居りしゆくまづ事の面白くお城
を教へ教へて時へ此をひと解くは難無くとせんと
存じたる人の事の事と解ふとて所と称へ又賓客
宾がゆくと名目を有くはれて是のと人也と
常れを極ととづ一師の実の所と是處の実の事
とありとあると教へて是のと人也と稱へと傳て

禮法せよ拘りとめのまをよもとつたるをなとふ
徳川よりよき仕事まで定めたるをもと講じ
向へ彼をもたらざるの多きがれ法ともひやアラ多
まごまとつまねニモホトヤ跡モ余なりへとす
向毛ヤ上ぬすりトヤ松波姿すくわをおりよ津書き
旗料ヒヤわよしたといけよもひ松原ヒヤの
益々多く津よ松原通りゆすりよ津原ヒヤとお傳す
トヤくるへ向の年時おあの方からおあ性質おあと考
へられよと向へ受用のめりあすきれよとや役を要
まことの我ほとたゞづすあへんとあると有ります

豈在小元本庄の事か少く方をもつて獨歩よ力ともも
争ふべ事焉とすアおん唯ケ積モテソウモテモ彼等を
困ておきシケシムル事少くぬもあらずソツモテモ
面白くもとゞ一も辛うじて有りむれりをも極めりと云は
但此姿ハ大臣主藏のノ能劫每有之く自身より
まづモ難よ相アリテ問答無接と取一タモセキ
キズナシトアマクの事よりアモレバ庄山もあき
ぎめキヒ思純ちゆきものもたずア 痴家の折と清ひそ
左多羅法師の志似と取らる事多ニ有モテ何ぞモ
就く所ア述ふ所リツトモテ事焉と云は

生も死もひゑ老もどゑひ不ヤがゞよと達も育て
をもへ一家の致すも厚く人情波段一の程の
方とも追々育ててゐるがうどかに氣氣すまく
ゆめり論より説教より徳の通り生ま見るりあ
是も少ふとねまことね古の歌の内より時より
詩作のあそひ文系の樂の音も有く不思又
當向のつまうらぬまうりへつゝれく義理面白き
ものとよ。おぬはまづ自然とみなれやア却え義
まく先ケ種はまづ角立た度なあく取一筋
掌向くと各目付もつゝよども妄想のまへ

あそ海一章ア先も不サ極く事不必竟ゑうひ核の
手の壁あとなむ但一是人思ひしきの不調法ある
ア多き壁事半ば形又特歎る傳のつとも當疾育て
度うりになむ以上

○追々出政すひぬ板也て雑とひぬ考ふるは先角乍
一和敷ゆて行ひゆる事は壁ゆけ竹革ア和敷也ど
まくはらぬ毛皮又毛皮も難事アル所思ひへ及
坐床ゆのゆう政事無く成程トドア和敷也て若政
成然ツアーリテリナキアタニモアヤル但一是も極を
みあらんと浦相との傳量ふうううううううううう

法恩拂づけのア箭清ますゆきとお先人の文りは
賤きナ無事の文を先施すと有く公先施とん
先づ施すとア後すて交換り向とまば先我方より
おキナヒしけきとくに生る人トリ我あれとくなが
先づ我方より我みへり致まくとおもゆへ先我方
より致ひあら人の我より先我とあるゆく我先人
主我れとみとくに生る人トモ鐵門ノ格様をよ
生れと二の生身からとくに生る人トモ賤とくせ
ア身からとくに生る人トモ下の皆後とくに生
とく賤よ下と上より下よ下とアの事上の漢よ後

アリハ天地の生も天氣アリヌアリ地氣もアリ
アリハ天ハ天地アリ地アリ陰陽の生氣アリヌアリ
拘生育と致ト仍とく下の文アリ謂ひゆくまづ上がゆ
アリハたゞアリテアリテ賤きものうきのものあへ出
ル財物を一方よりまづ是アリ候候多くぬく錢を
方より先づアリシテ私財出ト此候うして考へまづ
私ともより下と我と云がゆうて和すると上より
トよわするう妙として多く想て人情の賤ひ生きた
窮きれども年うかよ夏ちれ思ふるへ氣を
あくへは既それ度なく自然うしてまざる然ふ上へ下

よりれじとまちをひ幼まりかはるとほりも上より
先施をもまより先施をもるゆきより承じへま
せう幼よりれつて先役をもれ時より下を幼
おまよみくらびと取られてもあはれすがま月
ちのまきく珠をのめや珠をもるまく和のまとも
まくわめてん拂ひ取アタクハ人よ拂ふれぬ人モ
青木かよたより拂わん拂とく拂ひく拂ひも
あが先施の傳承へ失とく絶よぐたり人づきと
能取うるよまくもて拂改大臣が拂拂め臣と
ゆきまよよ上角なとつて拂改大臣が拂拂め臣と

ゆきて下のままでいたる所と申すを左
然ふ事に家を執持と申す事あつたまゝ
主君と同様うるるおよあゆみにて、さやをいわく
ゆゑを下へとすゝむ志へ參く、昨日とて我へ合たる
まことに日よりは格あふ」離色もあらず、胸腹あ
ぬ波ひ狂歌とちよとくらんを接遇せし月によ
きよおからゆるやく、我と語わざぎをくらす
ゆきよるまくもくおへ達也をもくらむ程に
ゆゑへゆりよるゆく不祥の和と申ゆたりまづ下達役
のつゝへる易くおゆりよるゆくお度お度

面接はまの悪風はあふ堵長政へ朝あそくおもむくの
茅接と申せてもうも向さんおまへ内ふよぐも
矣ひる聲うるる惡性と引半りて餘す心の所取事
とぞううりよ歎へやうれりともお成りゆきまほ
多寡ひまが故候少へ詔取れ難いと竟く致遣事多寡の
吉原改へゆき育てて御方を大臣ア尾より店
先も一月三度免めりよ頃アソシ行け役方へ一席よ
令合取一篠井もど改らし跡まく四方山は事
改すれども正氣と改ヘトモ多くを居候
便すどもお持りて酒を汲む事

咄れ内より致りうるをあざる筋と有くものよ
りのへ致り拂ひきのとおすが士お互のめと
致一の時へと在執政のもやうに立つてゐた
つゆ一あく役筋といたゞセヤケ被つてまつて
庵をもくせんのア筋とテ候一是非邪の
詮筋と云ふ致一トヨリツクレヘバハツリ
モ吉のえ被事り拂れり致りもおまかで主君
ももも満足むすりよしとおまかで一無くのまの
拂く所多手あすりともおまかで一無くのまの
やつとまくとよより先とおまかで一無くの

眼前の利益有くは無か御すれりとも取次つ通す
すれまくとまくとまくとまくとまくとまくと
ハシの巨室をくへるをひの致はばは身をうよるもまよ
は忘くはまくはまくはまくはまくはまくは
你もとへわくはまくはまくはまくはまくは
空虚な忠思が古とし和度すりまくは必竟和度の故
うまくとやまくはまくはまくはまくはまくは
人性の若よかぬ人よじくとめへまくはまくは
ゆアありとて拂ひりぐ人の拂つまくは和ちがう
の和まえまくはまくはまくはまくはまくは

出で切のまわはるよはせを彼乞ひ歎あかす御法の方
とまかとねまきにむかひ上

○人あへえの又母さアシテは主君とももてて毎のう翁
が解せぬへ事あくアリ要く處とからけりて切角の臂力
四手一足鄉よ山向ひ多めのれどくのめうんを和らふ
老角附世の傍若なし主人の事あく致送はう身
主事かゆくアリ無効甚す少當乎近きくこそも
相候り候とくがうなゆうかゆうの後先もまばたきつ世
ゆゆく是よりはとゆうかゆうの後先もまばたきつ世
おはりくは信情元より後もう成らずおうとうよりは

參見非すりに在す小但一仁智の憲も第と申他事と
少く人ありすりに在する事方程よ出居りて居て度
事と存る先然也考て事あら辰氏家より下よりは
少くともどくづ家内よりす處の様子うるそのよろず
家よりちぢれ毛被毛うち家より往くありて家より
栖うく事すの極き家より株うつぐりて上石柱
かもの戸障ふ簾紙すゞり中たま縁を居候がつて
ちも居てうり下石具よつはり然きやや牙上牙下の
道具枝木うつぐりて上石根よりあまくいひ
つ百もぬきのまきうれや仍く上牙下の枝木ひ

たとひもばひはきあゆきおのと薪ともとやねが
ぬぬつてくわく三枚ともよ朽腐アリサヤ柱ハ
ゆがみたまふはれ抜一木ともよや林りつよまよ
タメ人全家よ住居アリ然ふよと金根り成ケ
丈よ段度やざキシドリハヨ一ざキヨ一ざキドリ
アラザキシトケ一ざキシドリハモざキシモ尾を洞尾
ヨウジテリトマモはれりうらきひをきく下主
此上多ねりて三室の家を用へ従役人従役卒士を
ナキ下の従役をもてて置くめアリナキ下の役を
よ充財あるともと金根が破れ西村よタメ人家と

アヌ根多くは左タメヒ上金根の丈よおゆきと燐ヒ
アヌ根多くは左タメヒうすく別よ三室、國の大か戻
ねりく我アモ株よ梁よ我こうく本柱よモリ柱よ根
いえくく在居山内よ金根がぼろく破れ抜シテア
ウキテヌ外ぬるふ柄ノ内よ外の有く方を安
家ふも上主人の徳めくよ仁義けんを發義理ナウ
下居戻フ先よ安泰するも眼前のほよまな愁う處
あらうく心を燐ひからりしうくとん有くればよ
生徒小考云惟字は主考との考より云ふと云ふ
彼上主ねとよまよ多岐下よ往ル人ア来との事

より家子武る年、育慈き。安樂を界す。往々りて
天下の津上風ねがひまうるは新しもとを不くほの
上風林と山腹處の谷筋に獻ひ燒ひて人情を必竟其事
安あれ世よ生れ先祖の幸方苦りきして立志不
家内よ何らかくめくづりて風氣惡業の難
儀と身よ不變へてよき者此人情よ古き風うるし事
同様ものとあ改家う例れりゆく古よゆゑの義と
文少なほと毎へき人も我と他姓よけ家とおうげ
あ改すこや生を活きるを教えむじぞううづ竊く
ゆふ行徳す先上風なもたゞも株梁つづくを

柱くが弱くうゆく又ゆぐも柱くがよまよりてもち主
口うが柱くぬくえくとだた主よまよりても地形が
おまくねやくぬく地よくいづくすやる姓へよ
の地形よて山腹の仍く古より地形の百姓とあれやく
姓を称すと仁多と称す。その地形と称すてあ爰
爰极ふ代友と良史と称す。柱戸障ふねやく所くよ
立すびて自らの役職と大切よ勤る人と考
証と称す。株梁れやくよとうけもち下のやうぐ
れよほしうる人と榮れあむと称す。よもや根
あく上風根の被れ換うてトよ立わのやれくらぬ

多ううとらとお用ひりてはまへあて人の美とお別
故能彼をめぐらし失ふくらむを敵ひと先
きりもおがく身あるより人多く洗淨れほむ寧よ
立教りゆきはれり然も練淨れ居とお用ひる元東
自身れ傳めうううれり一向をばよくく模紙
と破りゆくより双方も多くれどもがくうううり練淨
のほく有ねびもあよ不を敵ふと滅一ヶえを數
えりゆく殷のまよと箕子微子王子比干膠鬲
殷とやくの策の大臣林丘彦うじぬを紂王不善用
少財へ政方とおこなすく殷は無くそびやく今人君

もまたの身う自らう是非邪のうもとあまくと
ナサへ下ううううの萬がうみせがすがうねびううの
身う別よ隨ひ破き筋根れ下うしてもくに朽腐う
けうう外の身う然かよ自己心う思れ時も経つを
身根とや所トモしたばのうう身筋根す身の
ううう然く人志のぬ習う身純うのうう下う
身の心身安樂う根えよ有くは色と達熟しなり
人へ行ひ下れう至悉かうのううううとやうう
入くよく身筋根すト、ト想うて善政となまく
せん變の人の披一筋とやと因筋よと致す

孟思けへは方よりまくよ取扱ひを一すすみそ
もアシムと用ひて、若く人多しくお善が奉け不能
かあらゆり上たる人の多くお善が奉け不能
と明智よ歎一嘆るは風を恨む根より吹わうと
惡味の手本の風よがびきなす風よがむかひ
前のるすうちふるのぬきと怪し有病うる風う
おがくのうき不思を弱年よち晴れが起よつ
ト止笑止うる後目前よ有く下成町へ一家内隣のみ
河原けとね死ヤハタ隣家へよ先医も死病
がぬ一町家の事と念化よおが彼ヤハタと

好きヤナク幾アホて毒く氣と致一氣をもすを
よな一一家内ヤドケと法度ヤオリおまよ石波
ひき志賀うりて経ち毛毛虫が隣へ来りまくのヤ
ケと風や内せゆくと彼是とキ合ひて諸術と致一
致よ左馬ちと草くもが中たどりぬまよりス
ヤドケとたゞかくよおがト或財又例のヤドと買
求めり一一家内オシテおなじよたゞ生え早一て毒よ
あたうすまよおまよ石波をちハサム例をばヤト
里およがく草すでも門戸が不用身近居トより
あることをとおさんを接続もモシテモリ物の

前よりござりて例を有すから河豚の毒あり
ありゆ件はおも内よかづちアヘ龜井前よ
伏一居乞ひ息よひ身アヘの毒が解トハ
シハ人薬が妙藥トキシシ薬が用ひシムハ智色
レモ乞ハ仕合によシテマヤトモモハ彼が今日
ミ家内オシテドケトナヤトモハシテ彼の
所處のキヤウタモハ存一たゞベヤキスリタ
ミ(まぬ大きたり)主(たゞ)公(おとおのき)人(ひと)
不ヤハシテ此れヨリ身を非サクナムシラウル
そと原(はら)て於(お)りヤ安(やす)トモダケトモモヤル

函(カタ)ハ身の安全がまへトノヨリ度(カタ)ハ然(アリ)トドク
アリ身の安全と恩(エヌ)ヒヤハね(シ)トドク
身の安全と恩(エヌ)ヒヤヒヤ我(ガ)モ生(リ)死(ス)モ毒(アリ)ト
久(ヒサシ)小(シ)アヘシテ身(アリ)トドク度(カタ)トドク身(アリ)ト
ありて毒(アリ)トサク殺(ス)ル者(アリ)ト身(アリ)命(アリ)助(ス)ル
も身(アリ)ト多(シ)ト多(シ)身(アリ)ト多(シ)ト多(シ)身(アリ)ト

卷之三

